

柴田収蔵の蘭学修業

『柴田収蔵日記』に見る伊東玄朴塾――

吉田忠

佐渡出身の柴田収蔵（一八二〇―一八五九）は、蕃書調所出役の地図製作者・地理学者として知られる蘭学者である。だが彼は、弘化年間および嘉永初年では、郷里佐渡の宿根木における開業医であった。彼が医師を志したのは天保一四年（一八四三）七月のことである。そしてあまり間を置くことなく医学修業に旅立ち、同年一〇月九日に江戸の中根半仙（一七九八―一八四九）のもとに入門した。実は江戸は彼にとって初めてではなく、四年前の天保一〇年から一二年七月まで半仙から篆刻と儒学を学んだ経験があった。半仙は篆刻で名をなしていたが、医療活動を行っていたとは聞かない。事実、収蔵の日記によれば、専ら『医方大成論』を受講するにとどまっている。おそらく、これに飽きたらなかつたのであろうし、また医学の新知識を求めたのであろう、彼は蘭方医伊東玄朴（一八〇〇―一八七一）の塾に翌弘化元年（一八四四）（同二年の可能性の指摘もある）入門する。そして同二年秋江戸遊学を終え、帰郷し、宿根木で医療活動を始めたのであった。

四年余医療に従事した後、収蔵は嘉永三年（一八五〇）春再び江戸での医学・蘭学修業へと出発する。おそらく、前回の玄朴塾での勉強は長くとも二年弱程度であり、十分に蘭学を学習できなかったろうこと、また宿根木という小世界から暫し離れてみたかったのが理由ではなからうか。結局

その後佐渡へ戻ることなく、江戸で没することになるのだが、今回も再び玄朴のもとに同年四月に入塾した。以上の収蔵の足跡は主に彼がこまごまと書き残した『柴田収蔵日記』（以下『日記』と略記）による。『日記』は六年分現存するが、彼が最初に玄朴塾で学んだ弘化元年、二年のものは残っていないので、彼が何をどのように学んだかは判らない。だが嘉永三年一年分（庚戌日記）と安政三年（一八五六）九月から十二月までの四か月分（江戸日記）は存在し、収蔵の江戸での勉強、活動を伝えてくれる。彼は塾に住み込んでいたから、他の資料では見られない塾生の生活や行動が、この『日記』から見てとれる。玄朴塾の具体相は金武良哲「江戸日記」を除いては、あまり知られていない。むしろ収蔵の『日記』とて、あくまでも彼が見た有様、彼の交際範囲内の記録であり、また彼が書き記さなかつた事柄も多々あつたろうことは容易に推測できる。こうした日記につきものの制約はあるとはいえ、以下では『日記』により嘉永三年、安政三年末の玄朴塾の様子を紹介したい。¹⁾

一、入塾

嘉永三年三月二六日最寄の港小木を出帆し、無事出雲崎へ着岸、二八日から陸路を江戸へと出立した。そして四月六日蔵前大護院に旅装を解い

た。早速翌七日、「伊東塾へ行、旧識を訪ふ。五郎川才八は池田洞雲と改名し、織田研齋在塾、然れとも兩人共に今日他出の由、田上…出て対ふ。因て空しく帰る。」期待して出かけたであろうが、前回江戸遊学で知己となった洞雲、研齋にも会えず、收穫なくこの日は帰った。因みにその後すぐ、洞雲は塾頭、田上宇平太は塾監と定められている。九日、再度訪れたが洞雲は今日も不在、程なく「洞雲帰り対面、入塾の事を請ふ。即刻諾す。池田洞雲取次して伊東先生に対面せしむ。」そして先生から「旦日「明朝」早速に入塾なすべし」と言われた。しかし塾に引越すにはまだ時日を要している。すなわち、一日、「伊東へ行、池田洞雲に請ふて塾中一同に対面し、入塾の事を請い、上村周聘から「塾中の別規」を聞き、玄朴に会い帰る。一四日、伊東塾へ行き、周聘、秬庵「原梅南か」、「井出」又太郎等を助けて丸薬を作る。この日、萩原広齋「丹後田辺」、手島蓼川に会うとともに、織田研齋「府中」、玄圭、水町玄道「肥前小城」と久闊を叙し、昔話に時を費やしている。一九日、入塾は「用意不調故止む。諸方に買い物す」とあるから、引越しの準備に手間取ったのであろう。

いよいよ翌日の二〇日に引越しとなった。そして塾監田上により、収蔵の席を指定され、他の塾生と対面、彼らの配置も示された。当時在塾の門生は二十数名であった。²⁾『日記』は二〇日の「付り」として、「此節塾頭池田洞雲、塾監田上宇平太、助教伊東玄桂、知事浅「砂」沢杏雲也」と伊東塾の布陣を示し、「此名目は七、八日前に定る所なりと云ふ」と附記する。因みに助教伊東玄桂「圭」については、「肥前伊東の家を継ぐもの也。当時奥に居る」と二行割の注記がある。

二、受読と会読

蘭学塾の眼目はオランダ語の習得である。その学習法で最もよく知られているのが、福沢諭吉の伝える適塾でのそれである。初学者には「江戸で翻刻になっているオランダ文典二冊」のうち「まずそのガランマチカを教え、素読を授ける傍らに講釈をもして聞かせる。」これを読了すると「セイタキス」を教え、「どうやらこうやら二冊の文典が解せるようになったところで会読をさせる」のであった。³⁾この後福沢の回顧は有名なゾーフ部屋の記述へと続くのであるが、江戸で翻刻になった文典とは、箕作阮甫がそれぞれ天保一三年（一八四二）と嘉永元年（一八四八）に翻刻した『和蘭文典前篇』と『同後編成句論』のことである。各原本の表題が *Grammatica, of Nederduische Spraakkunst en Syntax, of Nederduische Woordvoering* であったから、それぞれガランマチカ及びセイタキスと呼ばれたのであった。福沢の適塾入門は安政二年（一八五五）三月で、収蔵が玄朴に入門した嘉永三年（一八五〇）四月より五年ほど後であるが、この頃蘭学塾ではこの文典が初学者向けの教科書となっていた。象先堂に学んだ金武良哲の「江戸日記」によると、天保一二年七月には、大槻俊斎のもとでウェイランドの会読に参加している。一月には「箕作先生へマートシカッペイ受取二行ク。先生留守」とあり、一三日からセイタキスを写し始め、一六日に写し終っている。この時点で、収蔵が受読したような文典の句読のシステムがあったかどうかは未詳だが、文典が教科書として重要視されていたことには変りない。⁴⁾

ところで、嘉永元年の『日記』に一度だけだが「夜文典を読む」(4.27)

と出る。これは前回（弘化元年―二年頃）に象先堂で学んだ時に使った箕作翻刻の文典前編を持ちかえたものと見て差し支えなからう。しかし、収蔵のオランダ語読解力は十分ではなかったと思われる。そこで、あらためて「ガランマチカ」の句読を受けたのである。象先堂へ引越した翌々日には「ガランマチカを玄桂に句読を請ふ」(F.23)とある。しかし、ほぼ一か月後に「夜文典を復す」(G.27)とある以外は、言及がない。句読の師は玄圭であったが、彼は玄朴の姉の二男で、天保七年八歳の時玄朴の養子になったという。そして弘化三年（一八四六）適塾に入門している。収蔵が学んだ嘉永三年時点では玄圭は二二歳と若い。収蔵は三一歳でかなり年上である。玄圭は玄朴に鍛えられていたろうし、適塾に学んだから、若いとはいえ、収蔵に句読を授ける力はあつたろう。そして本格的に句読を受けたのは七月半ばからであった。これは後述のように、五月、六月は医書チットマンの受講に忙しかったからである。「ガランマチカ受講始む」と記す七月一七日以後は連日のように「受講」している。因みにこの日から

「文典受講し終る」九月二二日までは六四日あるが、そのうち五〇日（約七八%）受講するという精勤ぶりである。句読は原則個人授業であった。だが「文典を受読。玄桂、省吾より受講に付なるたけ朝早く来るべしと云」(8.18)と注意を受けている。これは収蔵と省吾の二人がいっしょに受講していると解すべきだろうか。「島田」東洋予に先って受講」(8.21)とあるから、受講の順番があつて、玄圭は責任者として、また省吾は時間通り収蔵が来ないと、自分の番が遅れて困ると文句を言ったとも読める。また文典を受読後、同日に「文典復す」と記す日が何日かある。復習をしたのである。また受講後、「訳す」と書く日もある。これは「文典之例に訳を付す」(8.8)とあるから、例文を訳したのであろう。受講は九月二一日に

終った以後も「武田斐三郎に文典を聞く」日が二日(10.13.21)ある。『日記』によれば、斐三郎はこの年の六月一三日に入門、一〇月三日に入塾したばかりであった。

当時の通例に従い、次の課程「セインタキス」に進んだ。まだ「ガランマチカ」受講中の七月一二日「書籍方「宮田」魯齋に請ふてレツレ「テ」ル之最達者に書せしセインタキスを借る」と、字体の綺麗な謄写本を借用している。自分も写すつもりだったのだろうか。しかし一〇月二九日には「岡村へ行、セインタキスを買ふ」と購入した。箕作阮甫翻刻の『和蘭文典後編成句論』は嘉永元年刊行されているから、これを入手したのであろう。テキストが手に入ったからであろう、翌々日の十一月朔日玄圭に受講を請うた。今度は城島淡堂と一緒に、「午後より玄桂氏に請ふてセインタキス之読を受く。城島淡堂共に講を聞く」(11.1)。こうして十一月にはつごう一二日、一二月は六日受講している。ここでも「斐三郎文典を聴く」(11.20)、「武田に文典之講を聞く」(12.21)と受講した。

会読は、福沢によれば適塾では、一〇人ないし一五人が集り、会頭が一人いて、皆の会読の様子を聞き、評点をつけるというものであった。会読では一般に、参加者は身分、先輩後輩などの関係にかかわらず対等に議論して切磋琢磨し、会頭はレフリーの立場に立つのが原則とされた。⁸⁾ 収蔵が文典の会読を記述し始めるのは八月三日である。「文典会読日によって文典玄桂子より之受講休み、会読之…を魯齋に受講。」また「文典会日に付魯齋より指示代名詞及関係代名詞之章受講」(8.8)と記すが、これはガランマチカのF.5. “Over de aanwijzende voornaamwoorden” (§§ 111-117) とF.6. “Over de betrekkelijke voornaamwoorden” (§§ 118-120) に当らう。会読の予習のため宮田魯齋から教えを受けたのである。約六週間後に

は、「午後より会席に出る。予動辭種類之条三「ママ」百二十四章より百二十五章□□講す。会夕方に終る」(9.24)とある。これはC-2. “Soorten van werkwoorden” (§§124-125)と動詞の種類を扱った二章を指す。

会読というとき黒丸、白丸と評点をつけ、成績の順位をつけたという福沢の塾塾の描写がすぐに思い出されるが、『日記』でも席次がつけられている。すなわち「各位之席を定む。宮田魯齋「佐賀」知事にて第一次之第一「高島」五郎「徳島」、第二「上村」周聘「佐賀」、第三「鈴木」玄昌「相州」、第四「島田」東洋「西肥栄城藩」、第五「森村」助二「次」郎「佐倉」、第六予、第七「永阪」順二「尾張名古屋」、第八玄「元」逸「肥前多久」、第九「竹越」玄通「英」。西塾第志田上宇平太塾監「萩」、次之第一「久池井」辰吉「武雄」、第二「大宅」弥一郎「肥州武陵」、第三「鶴」藏六「肥前多久」、第四「土屋」得所「鯖江」(9.17)とある。順位の決め方の具体的な記述はない。この順次は当然ながら変る。「宇平太が指図にて席を五番遷し助二郎「森村助次郎、佐倉」七番の席に移り、「青木」玄礼「多摩」六番に居る」(9.25)、「武田斐三郎二番之席に居る。依而転席して六番之席に移る」(10.4)とある。斐三郎は六月一三日に入門したばかりであるが、すでに塾塾で学んでいたので、二番に入ったのは語学の力がかかりあったからであろう。実際収蔵は「武田に請ふて依ト加得氏之伝を受読」(12.27)とヒボクラテス伝の読解を斐三郎から受けている。会読は輪講会(9.13)、「文典輪講(9.23:10.3.23)」、「文典会(10.13)と『日記』では呼ばれている。また「第二番の圃に当る」(10.23)とあるから、輪講の当番の順番を、毎回かどうかはこれだけからは判らないが、くじ引きで決めていた。

安政三年末ともなると、収蔵の語学力は進んだらしい。「受読」は見られず、「授読」が出る。教える側になったのである。授読の対象は象先堂の塾

生ではなく、赤井と今井環一郎である。この二人は「赤井主人及今井講武場へ出る」(11.1)とか「赤井主講武場騎射の教授官を命せらるると云ふ」(12.30)とあるから、講武所勤務の幕臣であったと考えられる。⁹⁾ そのほかに、文典を佐藤革蔵に講じ(9.18:10.12.18)、「また高麗房二郎から「文典の受講を請」われている(10.27)。

以上はオランダ語文法の学習である。ふつうは文典前後編をしっかりと収めてから医書なり専門の原書を読む過程に進むのであろうが、収蔵は入塾して四日後にはもう玄圭に「チットマン異性厭衝の条句読を請ふ」(4.24)している。入塾した翌日に塾監の田上が「可読原書を示す」(4.21)とある。この原書は文典とも取れないわけではないが、文典は算作の翻刻本を利用したろうから、ここはチットマンの蘭文医書と解したい。これはドイツ人医師チットマン(Johann August Titman)の外科教科書の蘭訳本 *Leerboek der Heelkunde* (Amsterdam, 1816, 1819² (増補版), 1827³) の算作阮甫が「外科必読」として翻訳している。¹⁰⁾ 金武良哲の頃は、玄朴宅で「ブルメンバッフ心臓之生力ノ勢之部会」(天保12.4.7)があったが、ブルメンバッハの生理学書(Johan Friedrich Blumenbach, *Grondbeginselen der natuurkunde van den mensch*, Amsterdam, 1791)がテキストだったのだらう。実は収蔵は弘化三年佐渡にあって、せつせと阮甫訳「外科必読」を読んだり、見たりし、同四年も校合し読んでいる。¹¹⁾ これは収蔵が前回の玄朴塾で学んだ弘化元、二年時に「外科必読」を謄写したことを示唆している。したがって、チットマン外科書は収蔵にとって初めて接する書ではなく、十分その重要性を認識した上で、今回はその原本(第何版かは不明)の読解を望んだのであろう。¹²⁾

収蔵のチットマン受講は、文典の時と同様勤勉である。「受読」「受句読」

と記す日は、四月が二日、五月は連日のように続き二三日、六月は二一日、七月は二一日あり、合計四六日になる。これは、四月二六日に始め、七月一二日に終る句読の全期間六八日の六七・六%、ほぼ三分の二に当る。さらに受読はなかったが、何らかの意味でチットマンに触れた日(「復す」四日、「写す」四日、「訳をつける」二日、「読む、見る」三日)は一三日になるから、これを合わせると五九日(八六・八%)と驚くべき数にのぼる。例えば一週間に日曜日を休日とするよりもハイ・ペースであることから想像できよう。

チットマンのどこを収蔵は読んだのだろうか。四月二四日収蔵の句読の始まりは「異性痲衝の条」からであった。約一か月後の五月二七日には「チットマンロース之条より写し初む」とあり、翌日には「写したるチットマンロース之条に訳を付る」と記す。さらに受読最後の日の七月一二日には「羅斯痲衝之条より凍瘡之条に至り読み畢る」とある。収蔵が用いたのは第何版か判らないが、幸い第三版(一八二七)が京都大学江馬家旧蔵本として現存するので、これと対照してみる。本書は三冊から成り、第一冊は序文の後、第一部外科総論(Eerste Afdeling, Algemeene Heelkunde)四章で始まり、第二部外科詳論(Tweede Afdeling, Bijzondere Heelkunde)の途中、すなわち第一章から第八章で終わっている。第二冊は外科詳論の続きで、第九章から第二十六章まで、第三冊はさらに第二十七章から第四十章までと、外科手術一般を附録として収めている。収蔵が読んだ問題の箇所は、第二冊の冒頭、第九章「特殊な炎症及び化膿について」(Negende Hoofdstuk, Over de ontsteking en veretteringen van eenen bijzonderen aard, pp. 1-34)に当たる。この章はさらに六項に分かれており、今「外科必読」の訳語を用いると、順に一、羅斯様、羅斯(de rozige ontsteking, de

roos)、『二、痛風痲衝(jichtige ontsteking)』、『三、血瘡(bloedzweer)』、『四、哥兒(kool)』、『五、湯澆火傷(brandingen)』、『六、凍死、附凍瘡(bevriezigen)』である。これから明らかなように、収蔵は三か月弱の間に、第九章全体、原文にして三四頁を読んだことになる。痲衝(ontsteking)とは炎症のことだが、化膿の前段階とされ、「外科必読」の冒頭(第一冊、卷上一表)では「夫痲衝ハ人身上ノ最貴要ニシテ、忽ニスヘカラサルノ一病證ナリ：又且諸種ノ創傷ニ先タチ発スル者モ亦少カラサルカユヘニ此科ヲ学フノ初学先ツ其思慮ヲ精シクシテ此病ヲ驗知スルコトヲ求ムヘシ」と重要性が指摘されていた。羅斯³⁰とは炎症により患部が赤く、また時により腫れあがることを指した。因みに収蔵の第二回江戸行直前の嘉永三年二月では、親指、脚、脚跗、膝蓋上などに不調を訴える患者の診断に九回「痲衝」を使っている。

「外科必読」は「咸宇 箕作虔 未定訳稿」と記すように、時間をかけて訳が成った。なにしろ蘭原本が一冊三百頁を超え、全三冊で千頁に近い。したがって、現存する写本も冊数はまちまちである。武田薬品杏雨書屋はこの書が四セットあるが、そのうち二点(六冊と四冊)は「伊東蔵書」、「象先堂図書記」の朱印があり、またもう一点は玄朴旧蔵(いずれも乾4291)とされている。これを筆者も確認した。この事実は、「外科必読」が象先堂塾でいかに重んじられていたか、そしてその延長上にチットマン原書購読もあることを物語るものであろう。

嘉永三年の『日記』によれば、回数はいくつか少ないが、収蔵は「越原実箴付方会」なる医学の会に参加している。すなわち、「夜越原実箴付方会。林、大槻等の諸生三拾人余も会す。先生と戸塚：及洞雲等と評す」(5.3)、「今宵林にて越原実箴付方会。玄桂子訳す流産せし治験なり」(5.18)、「夕方

国林へ越原実箴付方に「萩野」広斎「丹後田辺」、「玉井」清斎「哉、高松」と行に同行す」(6.8)と三回出る。林洞海の塾で開催されたようだが、大槻俊斎の塾生など合わせて三〇人を超す医学生が集会したとなると、なかなかの盛会であった。この越原実箴とは越爾實幾のことではなからうか。四字目の理由は見当がつかないが、二字目の原は爾の俗字尔と似ている。¹³⁾ いまそうだとすると、エルジッキ(C. van Eldik)を指す。彼はA. Molととも医学雑誌(*Practisch Tijdschrift voor de Geneeskunde*, 1822-1856)を編集している。そのタイトル・ページの編者肩書きでは、ネイメーヘンの医学・産科の専門医で、ヘルダーランド地方の産科や医学教育の委員会の書記を務めている。エルジッキと言えは、玄朴訳「医療正始」として刊行されたビシヨッフの著書(I. R. Bischoff, *Grondbeginsels der praktische geneeskunde*, 3 dl., Nijmegen, 1836-1838)の蘭訳者としてよく知られていた。同書には「漢越而実幾」(van Eldik)と記されている。『医療正始』は天保六年(一八三五)に初編が出て後、三冊ずつ刊行され、最後の第八編が出版されたのは安政五年(一八五八)で、一三年を要して完結している。嘉永三年は、その第七編(一八四七)と最後の第八編の間にあたる。さらに「越而実幾経験書」や「越而実幾経験集録」と題された写本も存在する。あるいは付方会とあるのに注目すると、処方につき議論・検討する会のようだから、そのテキストは未見だがエルジッキの『内科医・外科医のための処方書』(*Recept-boek voor genes-en heelhundigen*, Nijmegen, 1825, 1834²⁾)の可能性も残る。先の研究会とこれらの書の関連は今後の検討課題である。¹⁴⁾

三、医療

収蔵がチットマンを初めとする医書の読解に励んだことは上に見た通りである。伊東塾では玄朴が医学講義を行った形跡は『日記』からはまったく認められない。これは金武良哲の「江戸日記」においても同様である。

この点は坪井信道とは対照的である。信道は毎朝講義を行ったらしい。塾則(弘化四年発表)に「毎朝講義之節ハ、両塾「安懷堂と日習堂」不残出席可申事、妄ニ欠席申間敷候、且ツ講席終り候迄ハ、退席無用ノ事」とある。¹⁵⁾ 毎朝の出席が課せられ、中途退席は禁じられていた。講義の内容については判らないが、当然医学・医療に関わることが言及されたであろう。ここに薩摩出身の前田信輔による「日習堂医按」なる筆記(東京大学附属図書館蔵「客窓漫筆」所収)がある。これは嘉永元年(一八四八)五月一日から六月二八日にかけての一〇回の会合の記録で、各会患者の症例が示され、それに対して塾生が診断、治療方針を記した医按を提出し、信道が評点をつけたものである。¹⁶⁾ 一回を除いて九回は三と八の日付があるから、どういう形式の会かは不明だが、「朝講」とは別に、上級の塾生に対してのみであろうが、この症例研究会が定期的に開かれていたようである。象先堂における医療教育の実態は不明であるが、現存資料から判断する限り、実地医療教育に関しては日習堂は整備されていたといつてよからう。

医療の実践はふつう代診という形で行われていた。ところが収蔵自身が代診を行ったという記録は『日記』には出ない。『日記』では、たとえば池田洞雲が、入塾前の収蔵が寄宿していた大蔵院へ代診に来たことが出る

(4.16, 19)。また「砂沢」杏雲今日より下へ移りて代診を勤む(5.17)と、代診の事例がないわけではないが、きわめて少ない。これに対し、金武良哲の「江戸日記」は、彼が玄朴塾に天保一〇年九月二日に到着し、約一か月後の翌月九日には痔瘻、また一三日には眼病の患者を診、翌年も小児に浣腸をしたり、胸水病の往診を記している。またこれより先天保七年三月に小城の堤柳翠が玄朴塾に入門するため許可を求めた暇願に興味深い記述がある¹⁷⁾。柳翠はそれまで佐賀の島本良順についていたのであるが、玄朴から良順宛に「当時可然門弟茂無之、反的手支居候趣を以、誰差越呉候様」要請してきたというのである。柳翠は「幸之折柄」と師良順の推挙を得て玄朴門に入るのだが、門弟が少なくなつて、かえつてさしつかえ(手支え)が出てきたというのが要請の理由であつた。

すると、収蔵の代診の記述がないのは、どう理解したらよいのだろうか。収蔵はすでに一年以上伊東塾の経験があり、今回が二度目である。しかも弘化二年から今回の出府まで四年余の佐渡での開業医の実績がある。難病はともかく、現今の総合医としての豊富な経験の持ち主である。たとえば江戸へ着いて早々、宿舎にしていた大護院の役僧の「痔疾の薬を処方」とある(4.10)。おそらくこうした臨時の診療は少なからずあつたらう。また後述のようにに彼は古賀謹一郎に師事することになるが、「古賀先生冒寒術恙、予が先生「玄朴」来ては診す。古賀先生下劑を服し、悶煩す」(7.23)とあるように、古賀のかかりつけの医師は玄朴である。しかし収蔵は「古賀先生昨夜より聊風邪、診察す」(8.6)と非公式かも知れないが診ている。おそらく玄朴はこれらにつき薄々には知っていたらうし、既に経験のある収蔵に普通の診療行為をさせる意義をあまり認めなかつたのではあるまいか。しかも当時は塾生が二十数名いたから、上級の者も結構いて、彼らに

代診の機会を割り当てねばならなかつたらう。それは彼らに臨時収入を与える機会でもあつた。さらに想像を逞しくすれば、玄朴にとって、後述のように、収蔵の絵などの模写の力は何物にも代えがたく、収蔵の医学修業にとつては有難迷惑だが、彼が代診に飛び回らず、塾にあつて依頼をこなして欲しかつたのではあるまいか。

四、種痘

嘉永二年(一八四九)六月待望の牛痘苗が長崎に到来し、江戸での種痘伝播及び安政四年(一八五七)以降のお玉ヶ池種痘所建設準備と設置・開所にあたり玄朴が大槻俊斎らとともに中心的役割を果たしたことは、よく知られている。しかし、その間の玄朴の種痘実施について言及されるところはほとんどない。現存する『日記』の嘉永三年と安政三年(九月―十二月)は、ちょうどこの間の記録であり、十分とは言えないが、このいわば空白期間を補う資料として価値があると思われるので、以下に種痘関係記事を列挙したい。

嘉永三年

「種痘の小兒十余人来る」(5.6)、「接痘の席へ出て加功をなす。伊東玄晁、水町玄道等来りて苗を採る。先生接す種兒四、五人あり」(5.20)、「接痘日…」(6.26)、「接痘に加功に出る。他より杉田成卿、大槻俊斎、山本有中、水町玄道、外に諸生式人来る(名を未詳)」(7.24)、「青木玄礼へ…より□御代官江川太郎左衛門殿より種痘之御触書を示す」(7.28)、「種痘に加功す」(12.17)。

安政三年

「種痘。水町玄道来」(10.10)、「種痘。水町、池田多仲等席に来る」(10.24)、「水町来る。種痘。良悦種痘の加功に来る。先生より許さず」(11.8)、「種痘。水町来る。…良悦来り…退塾の後初て種痘の加功をなす」(11.15)、「種痘。水町、池田、良悦等来り加功す」(11.22)、「種痘。水町、織田、池田、良悦等来る」(11.29)、「良悦種痘に来る」(12.7)。

これらはごく簡略な記事で、種痘の具体相は判らない。これは飽くまで収蔵が関わった日の記録で、それ以外にも種痘は行われていたものと考えられる。それでも「苗を採る」(5.20)という記事から、新規の種痘のために痘苗を採っていたこと、したがって定期的に既に種痘をした小児を呼び出していたことが読み取れる。この点は、安政三年一月の日付が七日毎になっているのに示されている。それと、嘉永三年時には、収蔵は「加功」と手伝っていたと記すのに対し、安政三年にはこの表現がない。収蔵は安政三年には、伊東塾のヴェテランとして種痘スタッフとして遇されていたためなのだろうか。

なおこれ以外に、「藤沢三省に同人父へ種痘の事を申遣したる哉否書状にて問ひ遣す」(5.18)とある。三省は、佐渡で世話になった両津の医師藤沢明卿の息子で、林洞海のもとに留学中であつた。これは収蔵が入塾して一か月ほど後のことである。佐渡にも牛痘種痘を伝えるべきことを明卿にアドヴァイスしたかったのではなからうか。収蔵の発言の影響があつたかどうかは不明だが、実は佐渡相川で初めて種痘を行ったのはこの三省だとい指摘されている。安政三年のことで、師の林洞海から種痘法を学んだのであろう。¹⁸⁾

実地に種痘を行うとともに、八月には収蔵は書物を通じても学んでいる。有馬撰蔵の「牛痘新書」を池田洞雲から借り(8.7)、また「五郎に請ふ

て有島「ママ」撰蔵が訳する牛痘新書之凡例を原書に校合す」(8.24)と、高島五郎の助力を得て、訳本と原書の対照をしている。この原書とはゴールドシュミットの『牛痘及び牛痘接種の歴史の一般的考察』(H.J. Goldschmidt, *Allgemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken en derzelver inenting*, Amsterdam, 1802) である。撰蔵は長崎留学からの帰郷にあたり、上野俊之丞(彦馬の父)から餞別に贈られたという。¹⁹⁾ 同じ原書を玄朴も所蔵していた。すなわち、「引痘書ゴールドスミット之仮痘之図を写す…玄礼に仮痘之図を贈り恵む」(8.16)、「先生にゴールドスミット仮痘之図を写し、…図も此振合にて筋にてくま取を薄墨になしてよからん事を窺ふ」(8.17)と、仮痘の場合の図の描法につき玄朴の助言を仰いでいる。「牛痘新書」はその後も校合するが(10.8)、学業を終え佐賀に帰る上村周聘に贈りとして贈っている(11.18)。さらに『日記』には「牛痘新篇」なる書を志田元良が写して来ており(8.4.8)、これを中根半仙の息子松柏に貸したり(9.12)、小林準作に貸している(10.14)。ところが、一か月近く経って小林が再び来た記事に、「清原謙齋旧名小林準策来りて牛痘種法篇を返す」(11.1)とある。無論「牛痘新書」と「牛痘種法篇」は同一書とも考えられるが、実は「牛痘種法篇」という表題の書は、フーフランドが原著で玄朴と洞雲が共訳して天保九年(一八三八)に成ったものがある。収蔵がこれを所持していても不思議ではない。²⁰⁾

五、師

『日記』で先生と呼ばれる人物が二人いる。一人はもちろん玄朴であるが、もう一人は古賀謹一郎(一八一六—一八八四)である。

玄朴への言及は多くない。伊東塾へ引越す前日に、「池田洞雲伊東より代診に来る。池田氏より、先生より申聞たると早く入塾の故、図物の模写を請ふと云々」(4.19)と、図の模写の依頼が飛び込んでいる。弘化年間の前回の入門時に、収蔵の図や書の模写の力を高く評価していたからであろう。引越した翌日には、待ちかねていたかのように、「先生より…図を写せと請ふ。此図銅板にて其密なる事容易写すべしにあらざ」(4.21)と困難な仕事を頼まれている。事実、四月二三日から「砲術書の図」を写し始め、終了する五月五日まで連日(二日のみ休む)模写した記事が出る。終了日には「先生へ返す」とあり、開始日には「神田須田町万屋忠八へゼーアルチルレリー図を写す料の紙を求に出る」とあるから、杉田立卿ら訳『海上砲術全書』の原書であるカルテンの『海上砲術教導指針』(J.N. Callen, *Leidraad bij het Onderrigt in de Zee-artillerie*, 1832) に出る図のどれかを写したことになる。また何書か不明であるが、「先生…の図を頼まる」(8.5)とあり、さらに朽木昌綱の『西洋錢譜』(一七八七)を浅草須原屋で購入したのはよいが(12.26)、同書の西洋の貨幣の図の写し取りを年末に頼まれる破目に陥っている。「先生より西洋錢譜之写を請ふ」(12.28, 29)、「先生の通を持行、万屋忠八より薄美濃紙を取る。西洋錢譜を写す紙也」(12.30)と云々具合である。

もう一つの例はフルシカンシングなるものの図の模写である。九月八日から図を写し始め、約一か月後の一〇月五日に「大概写し終る」とあり、その間一六日、なかでも九月一七日からはほぼ毎日写しに励んでいる。⁽²¹⁾翌日六日に「図校合す…図写し終り、翌々七日「写したるフルシカンシング之図を先生へ返す」。「図写料」を城島淡堂を通じ「先生へ…請い、「先生より図料金壹両壹分」を得、「外に三分借」りている(10.8-10)。この図

は、*verschansing* が塹壕、堡壘などを意味するから、何か兵書に出る挿図だったと推測される。⁽²²⁾

安政三年も先生の依頼は続いたようであるが、今度は図に代り、英語とオランダ語対訳の会話書のタイトルの字体の浄書であった。まず「先生より玄琳の英荷会話の浄書字体の改竄を請ふ」(9.12)とある。そして「先生より英対訳の会話を金助に刻せしむるに、玄琳が浄書を…す。先生頼に洋文の筆法を金助に示す」(9.18)。玄琳と金助が何者かは知らないが、蜂須賀金助は先生の熱心な教えにもかかわらずものにならなかったようで、結局収蔵に頼むことになった。「先生より英荷対訳会話の表題浄書を請ふ」(11.12)、そうして同書の表題を写し(11.15-17)、「写し了る」(11.18)の後、「会話の表題浄書」(11.21)を終えている。

いま一人の先生、古賀謹一郎は昌平黌儒者古賀侗庵の長男で、嘉永三年当時は父の後を襲って同校儒者となり、嘉永六年のロシア交渉応接掛を拜命し長崎へ赴いた以後の繁忙を極めた日々とはまだ無縁の時代であった。古賀との出会いは入塾三日後で、「古賀謹一郎先生へ「池田」洞雲に誘われて行」ったことによる(4.23)。因みに洞雲は古賀にオランダ語の手ほどきをした人物である。⁽²³⁾

この時収蔵は「自製する処の楕円の地球図を示して検討を請」うたのである。それは「古賀氏地理に詳に原書…の極精密の図を出して示さる」という古賀の世界地理学の造詣の深さに感銘を受けたからであった。ほぼ二週間後(5.7)、古賀より「予「収蔵」が地球図を一閱せり。予に対面して其可否示すべく来るよふに申給へと」書状にて呼び出しがかかり、早速午後古賀邸へ出向き、「先生より予が地球図に不審なる所に印し紙を著て示」されている。収蔵の地図・地理の業績に関しては別稿を期してここでは立ち

入らないが、これを契機に収蔵は古賀を頻繁に訪問することになる。この年にはその後計一四回訪れている。なかでも七月二二日から二五日までは毎日古賀宅へ出向き、「毎日至るも外見如何しき故、暫く古賀に至る事を休む」(7.25)と記すほど入り浸っている。両者の関係は収蔵だけに益があったわけではない。古賀との間では書物の貸借があり、「先生より地図を借りて草稿す。先生地名を讀みて予を助く」(7.25)と古賀のほうでもかなりの入れ込みようである。

安政三年当時古賀は蕃書調所頭取であった。前年八月洋学所頭取に任命され、三年二月に蕃書調所に改名されて、同じ役職に留まった。安政三年の『日記』は玄朴よりも古賀関係の記事のほうが多く見受けられる。この年の一月二三日収蔵は蕃書調所絵図調書出役を拝命するが、すでに九月には調所勤務の話があったらしい。すなわち、「晩に古賀に至る。…調所出役の事、山岡の言を以て時日を問ふ。帰省を許さず」(9.8)、また佐渡へ帰郷するらしい天野なる人物に、「調所出役の事別家同姓へ伝語等を頼む」と伝言を依頼し、さらに同日夜古賀宅を訪れ、「先生に面す。今日山岡へ調所出役の為出ても故障なき哉速に答を請ふの問合を遣すといふ」(9.21)といった記事が見られるからである。この人事の背後には古賀の推挙があったろうことは想像に難くない。なお山岡とは安政元年から六年まで佐渡奉行を務めた山岡八郎左衛門景恭である。安政三年末の三か月で収蔵は二二回古賀に面会しているが、出役関係の記事が多数である。なかなか山岡からの返答が得られなかったらしく、「古賀に至り先生を見る。曰く、促しに来るか」(11.12)とあるが、進展打開の督促とみられたのであろうか。また一月二七日に「謹堂先生に面して…を問ふ。未だ山岡の答えを待たずして閣老に出す。急に組頭を山岡に遣して其答を取ると云」とある。一二

月二三日山岡から「蕃書調所掌図」を命ぜられ、「古来例なき」と褒められた。早速その後玄朴及び塾監等に出役任命を報じている。なお『日記』は、大久保忠寛の調所総裁任命につきいち早く伝える。夜古賀を訪問し、こう告げられている。「先生」語て曰、調所総裁大久保氏命を奉く、と。」(10.23)。古賀は面白くなかったであろうが、「調所退職は…せずと云」(11.4)と語っている。結局大久保は翌年四月駿府町奉行に転じたから、古賀は頭取としてトップの位置に再び立った。『日記』は失われており詳細は不明だが、安政四年から亡くなるまでの約二年半のその後の収蔵の経歴にとっては、古賀が退職しなかったことは誠に幸運だったと言えよう。

六、交友

嘉永三年四月収蔵が玄朴塾に入ったのは三一歳、満年齢で言うところにか月半ほどで三〇歳になる、二十代も終らんとする時であった。塾生は二十数名いたらしいが、同年だけでも一三人が入門している。盛況と言つてよからう。入る者もいれば出る者も無論あった。おそらく新参者は二十代で、彼より年下の者が多かったであろう。塾生同士の個人的交際の記事は『日記』にはほとんど出ない。例外は夜の酒席であった。

収蔵は無類の酒好きであった。これは天保一四年の日記から変らない。嘉永三年の日記に付せられた出納簿「諸雑費」によれば、一〇月、十一月ともに一六日飲んでゐる。独酌(たとえば「12.11.4」セルフヂリンケン(zelfdrinken, 11.2)もあるが、もっぱら塾生とともに飲み歩いた。繁々と通つたのは伊勢屋(伊亭、勢亭、勢州楼とも記す)である。²⁴⁾

収蔵がもっとも親しく飲み歩いたのは上村周聘である。入塾を請うた四

月一日に会っている。「門人姓名録」によれば周聘の入門は弘化二年九月一五日とあり、収蔵が前回象先堂で学び帰郷したのが同年秋とされるから、この時既に出会って旧知の仲だったかも知れない。収蔵の帰郷は同年十一月という説もあるから、この場合なら知りあっていたことになる。酒席を共にしたのは周聘が郷里佐賀に戻る十一月末までに一四回を数えるが、ある時は周聘が「大酔」して背負って帰っている(5)。周聘が学業を終えて帰国の準備をした時は、前述の如く『牛痘新書』を贈り、帰国前日には塾生が集まり送別の宴を設け、同夜収蔵は「外科要伝方」を贈る(11.20)。そして帰郷当日は、宮田魯齋、島田東洋、高島五郎、青木玄礼、竹越玄通〔英〕とともに品川宿で別れを惜しんでいる(11.21)。この年一緒に飲んだ回数が多いのは鈴木玄昌で一七回、次は鶴蔵六の一三回であるが、鶴は六月一九日入塾で、一か月後には久池井辰吉と一緒にいるが、収蔵と酒席を共にしている(7.18)。

安政三年の日記になると、高島五郎や鈴木玄昌とは相変わらず往来があるが、顔ぶれも変る。五郎は、古賀がロシア使節プチャーチンと交渉するために長崎に向いた際の「従史」九人のうちの一人であり、蕃書調所に先に任ぜられていたから、先例を種々問うたり、互いに泊まりあう仲が続いた。玄昌は玄圭が万延元年に亡くなると、玄朴の二女と結婚、玄朴の養子となり、伊東方成を名乗る。彼はボンペに学び、林洞海の子研海とともに帰国するボンペに伴われ、オランダに留学した人物である。そして神田孝平、杉田玄端、津田真一郎(真道)、箕作秋秤ら、後年名をなす人々と知り合いになる。

七、結語

伊東玄朴、古賀謹一郎というその道の先導者を師とするという恵まれた環境のもと、収蔵は才能ある人物と交わり、また啓発される書物と出会うことができた。蕃書調所出役に任命された以後は伊東塾からも出、医学の道から、地図製作及びその準備のための世界地理研究に専心したと思われるが、それを伝える資料はない。安政四年四月父の墓参のため一時郷里に戻るが、二年後の同六年四月四日飯田町の役宅で病死したと言われる。ちょうど四〇歳、もう一〇年永らえたならば他の調所勤務の面々同様、蘭学者としてより輝かしい業績を遺したと推量される。

注

(1) 『柴田収蔵日記』のテキストは二種類ある。田中圭一編『柴田収蔵日記』上下(小町・町史刊行委員会、一九七二)および田中圭一編注『柴田収蔵日記』1・2(平凡社、東洋文庫、一九九六)である。現存日記は、天保一四年(癸卯年中日記)、弘化三年(丙午日記)、弘化四(丁未日記)、弘化五年改め嘉永元年(戊申日記)、嘉永三年(庚戌日記)、安政三年(江戸日記、ただし九一―一二月のみ)の六種に、天保一三年(年中出府雑録)が加わるのみである。なお東洋文庫本は紙幅の関係であるが、弘化三年、四年の日記は収録されていない。本稿では頁数ではなく、年月日(旧暦)により当該記事の箇所を算用数字で引いた。

また柴田収蔵の生涯については、以下の文献を参照されたい。山本修之助「柴田収蔵」、同「放送 郷土に輝く人々」(佐渡郷土文化研究所、一九五七)、成田美紀子「柴田収蔵について」、前掲小木町本『柴田収蔵日記』下巻、三三三―三七六頁、田中圭一「解説 柴田収蔵の生きた時代」、前掲東洋文庫本『柴田収蔵日記』1、一三―三三頁。医師収蔵については、次の文献がある。蒲原宏「医師としての柴田勘齋の生涯」、『日本医事新報』一八二四号(一九五九年四月二日)、五一

―五九頁、長谷川一夫「越佐における西洋医学普及の基盤―森田千庵・柴田収蔵を中心として」、『新潟史研究』二三・二四合併号（一九六三）、一一一七頁、田中圭一「病いの世相史―江戸の医療事情」（筑摩書房、ちくま新書、二〇〇三）、速水健児「近世佐渡における書籍を巡るネットワークと医師・海運業者―柴田収蔵日記を中心として」、『国史談話会雑誌』四七号（二〇〇六）、二九―三五頁。

(2) 今『日記』の順に列挙すると、塾監田上宇平太、讚州来島謙助、肥前佐賀宮田魯齋、阿波高島五郎、佐倉藩森村助二「次」郎、伊予谷口泰之「元」、武州相原村青木玄礼、上村周聘、伊予浅「砂」沢杏雲、相模上溝村鈴木玄昌、藤田弘庵、金吹町竹ノ越玄通「英」、肥前武雄久池井辰吉、肥前武陵大宅弥一郎、肥前長崎古賀央助、肥前島田東洋、武州府中鈴木玄岱、同所織田研齋、讃岐高松藩玉井清齋「哉」、池田洞雲、肥前佐賀厚柵庵「原梅南か」、…泰「大竹俊泰か」、阿波美馬郡貞光村井手又太郎、丹後田辺萩原「野」広齋、村上正省、城島領庵である。

なお本稿では、伊東栄『伊東玄朴伝』（八潮書店、一九七八〔一九一六〕再刻）所載の姓名録との違いや比定を適宜「」の中に行った。玄朴に関しては、本書のほかに青木歳幸『伊東玄朴』（佐賀城本丸歴史館、二〇一四）、緒方富雄『伊東玄朴の人と交友』（『日本医史学雑誌』一七巻三号（一九七二）、五二―六六頁参照）、「福沢諭吉『福翁自伝』（岩波文庫、一九九二〔一九七八〕）、八一―八二頁。やや後に入塾した長与専齋も同様の事を伝えている。『松香私志』（東京大学医学部衛生学教室、一九八五覆刻〔一九〇二〕）、九―一二頁。

(4) 金武良哲の「江戸日記」は、池田正亮『金武良哲』（私家版、一九八四）、一七四―二〇九頁に写真版が収録されている。以下の同日記への言及はこれによる。「山村」と良哲の旧姓の署名がある *Synopsis* の写本が良哲旧蔵書の中に現存するとの報告がある。松田清編『佐賀藩旧蔵蘭書目録』（科学研究費報告書、二〇〇四）、八六頁。なお『日記』に玄朴塾生と出る原梅南旧蔵の「設卯多幾斯・和蘭陀語法」は天理図書館に現存する。これについて言及したことがある。拙稿「江戸時代の西洋学」、『ピプリア』第一二八号（二〇〇七）、一五五―一五一頁参照。

また大槻如電『新撰洋学年表』（柏林社、一九六三再版〔一九二七〕）は天保四年の条（同書、一一八頁）で、この年玄朴が象先堂を開き、「マートシカッペイ文法書を塾課とす」と記したうえで、「此書は玄朴が長崎より持来りしもの…天保に至り坪井伊藤「ママ」両塾に於て和蘭原書の文法書を学課に用ゐしより蘭書の説法更に大進歩を致せり」と注記している。典拠が挙げられていないので直には信じ難

い。ただ良哲が阮甫に「受ヶ取二」行ったという表現は、翻刻のためか、あるいは研究のためかは判らないが、玄朴所持の蘭書を阮甫が借り出し、これを受け取りに行ったとも読める。それはともかく、おそらく如電の影響だろうが、玄朴が長崎から「ガラマンチカ」と「センタキス」の二冊を持ちかえたと説く記述もある。小澤清躬「蘭学者 川本幸民」（川本幸民顕彰会、一九四八）、一六頁。

(5) 塾塾に入塾は弘化三年九月二日で伊東玄敬と記している。また入門にあたって坪井信道が玄朴に代って玄圭への厳正な教育を洪庵に依頼した書状（八月二四日付、玄朴宅にて書す）が残っている。前掲『伊東玄朴伝』二四〇頁、及び青木一郎『坪井信道詩文及書翰集』（岐阜県医師会、一九七五）、二五六―二五八頁。なお『日記』は玄桂と記すが、引用以外には玄圭と通用に従った。赤松則良（大三郎）は、安政二年坪井信良塾で学んだ頃の回想に、「塾では前にも云ったやうに塾主たる信良先生が自ら教へたことはない。皆塾頭並に其下に居る五、六人の先輩の塾生が他の者の手引きをする」と記す。玄圭から収蔵が受読した所以である。赤松範一編注『赤松則良半生談』（平凡社、東洋文庫、一九七七）、一五頁。

(6) 「受読」と「復す」が同日に出る日は以下の通りである。7.18.21.24.25.27.8.2.4.5.10-11.13-15.21.23. また「訳す」が出る日は8.8.24.9.5.9.15.17.19-20.二二日に「訳し終る」とある。これより九月になって「復す」から「訳す」に変わっていることが判る。その外にも文献を「見る」（10.11）、「訳す」（10.16.18）、「読む」（10.17.23）と出る。

(7) 受読の日を列挙すると、11.1-2.4.8.10.12.14-15.18.22-24.12.4.6.9-11.15である。また同日に「訳す」とあるのは、それぞれ11.5.8.12.15.24.12.9である。

(8) 儒学に始めるこの教育方法については、前田勉「江戸の読書会―会談の思想史」（平凡社、二〇一）が詳細に論じ、たいへん参考になる。参照された。

(9) 赤井、今井両者に授読したのは七回（9.2.9.12.14.24.10.3.16）、今井が病氣や当直などで欠席し、赤井のみが授読は五回（9.6.19.22.10.1.13）、今井のみが受講は二回（9.28.12.9）、そのほか「授読」とのみあるのが一回（11.21）である。

(10) チットマンの外科書及び「外科必読」については、阿知波五郎「わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響（3）」、『日本医史学雑誌』第一二巻第二号（一九六六）、五六―六二頁、及び関場不二彦『西医学東漸史話』下巻（吐鳳堂書店、一九三三）、四一九―四二六頁参照。

(11) 弘化三年では一月八日にまず「読む」が出る。閏五月二四日から七月九日にかけて

て計二六日、特に六月は連日読んだり、見たりしている。弘化四年の校合は、六月一日に始まり、七月二九日の「校合相済」まで一八日間行っている。もちろん読む、見る日もあった(6.15.17.7.17.8.15.10.3.17.11.4)。

- (12) 玄朴塾で学ぶかたわら、収蔵が借りたり、写したり、読んだ書物については、別に論じたので参照されたい。拙稿「柴田収蔵の集書活動——『柴田収蔵日記』に出る蘭学関係書」、「一滴」二四号(二〇一七)、一三—一四二頁。なお天保一年(一八四〇)九月長州藩医学館が開設された際の会読日程に、七の日は『医療正始』に、九の日は「外科必読」がテキストとして指定されている。岡原義二「青木周弼」(大空社、一九九四「一九四二」)、一三七頁。この二書は天保から弘化当時の標準的な教科書だったのであろう。収蔵は弘化初年の江戸遊学時にこれらの書に触れたと思われる。

- (13) 傍証は、「悉乙保原経験録」(弘化4.21)、「弗原綿弘弗」(嘉永元2.15)とあるが、前者四字目、後者二字目の「原」を「尔」と置き換えると、それぞれシーボルト、ブリュメンバフの読みによりよく合うことである。

- (14) 『医療正始』は、呉秀三「箕作阮甫」(大日本図書、一九一四、一七七一—一七八頁)によれば、阮甫の訳だとあるが、今は玄朴訳に従っておく。なお未見だが、伊東玄朴・林洞海・青木謙造訳「越爾実幾経験書」(年代不詳、京大富士川文庫、杏雨書屋)が存在し、これは「同経験集」や「同経験方」とも呼ばれている。この玄朴、洞海という訳者の顔ぶれはなかなか示唆的である。実は東京大学図書館にはよく似た写本三冊が存在する。二冊は洪庵文庫の「越爾実幾経験集」及び「越爾実幾経験」と題された書で、残りの一冊は鶯軒文庫の「越爾実幾経験書」である。「越爾実幾経験書」は「越爾実幾経験」と記載の順番が違うがほぼ同じであり、「越爾実幾経験集録」とは一部同じ病症が扱われるが、訳文はかなり異なる。さらに、これまた未見だが、研医会蔵の二冊本は「林洞海席上訳授、諸学生席上筆記」との記述がある由である。ただし、「間歇頭痛」が主題のようであるから、玄圭の報告とは関係ない。とは言え、洞海塾で、エルジッキの講読が行われていたことを証するには足る。因みに、「日記」には「此節島田東洋も玄桂氏之様に毘私骨夫を受読」(7.15)とあるから、『医療正始』の原書、エルジッキ蘭訳の句読を玄圭が行っていたようである。

- (15) 「塾則」、青木一郎『坪井信道詩文及書簡集』(岐阜県医師会、一九七五)、第一部、三三—三三四頁、及び第二部、一五四—一五六頁。

- (16) 緒方富雄「坪井信道塾の研修記録としての前田信輔筆「日習堂医按」」、「日本医学雑誌」一六卷三号(一九七〇)、一—二〇頁。なお緒方は、信道が「朝講」で、ある時期フーフェランドの原書の一部を講じたこと、典拠を示していないが、指摘している。同論文、一六頁。

- (17) 青木歳幸・野口朋隆編『小城藩日記』にみる近世佐賀医学・洋学史料(後編)『佐賀大学地域学歴史文化研究センター』、二〇一〇、七二頁。青木、前掲『伊東玄朴』、三三二頁参照。

- (18) 田中圭一「病いの世相史——江戸の医療事情」(筑摩書房、ちくま新書、二〇〇三)、一五一頁。ここで出る種痘に参加した人名について一言触れておく。杉田成卿、大槻俊齋の両名は有名な蘭学者でいわば別格であり、殊に俊齋は玄朴とともに種痘所開設の中心人物であった。伊東玄晁(青地林宗の女婿)。あとは玄朴門下である。山本有中(伊予大洲藩)は門人録では青木玄礼の前三人目であるから、弘化四年か場合によっては三年入門であろう。水町玄道(小城)は金武良哲の二人前に姓名録に記されるから、少なくとも天保一〇年九月より以前に入門したと推量される。青木玄礼は武州多摩郡相原村出身で弘化四年八月二八日、松岡良悦(越後松岡)は嘉永七年八月一日にそれぞれ入門している。

- (19) 徳川撰三「緒方洪庵門下の三蔵(緒方郁蔵、有馬撰蔵、伊藤慎蔵)に就て」、「医譚」二号(一九三八)、四五頁。

- (20) 「牛痘新書」は年末に玄圭に返却(15.26)とあるが、周聘に贈ったのでまた借りる必要があったのだろうか。「牛痘種法篇」の成立年は、前掲『伊東玄朴伝』(七九頁)によった。研医会に存する「牛痘種法篇」一本には、玄朴、洞雲訳に加えて、嶋田南嶺、城島禎庵校とあるという。まさに玄朴塾の成果と言えよう。

- (21) 無論塾生からの依頼にも応じている。例えば、「青木玄礼頼之解剖刀式之耳眼之図設色をなす」(7.15)、「青木が写したる解剖眼球之図之設色をなし遣す」(7.21)と図の彩色を行っている。

- (22) 『伊東玄朴伝』(一四三頁)が「兵書の翻訳頗る多く」というように、玄朴の関心は多岐にわたったようである。なおフルシカンシングのオランダ語との比定は、イサベル・ファン・ダーレン＝田中氏の助力を仰いだ。感謝したい。

- (23) 小野寺龍太「古賀謹一郎」(ミネルヴァ書房、日本評伝選、二〇〇六)、三二頁。なお小野寺は、古賀が嘉永五年閏二月に宇和島邸から天球儀と地球儀を借り出し柴田生とともに見た、と記しているという(同書、二九頁)。これは収蔵を指さす

が、断片ながら、『日記』の空白部分を占める貴重な情報である。

(24) 「諸雑費」に出る嘉永三年の出費を分析した成田は、飲代が全出費の五割近くを占め、書籍費を含めると七割を超えると指摘している。成田美紀子、前掲「柴田収蔵について」、三六四頁。なおここで言及した酒席の記録は便宜上「諸雑費」によった。しかし、これは金銭の遣り取りの記録であるから、支払った場合のみ記され、たとえば、ついで飲んだ場合はその日には出ず、後に支払った日に出るかから注意が必要である。支払いは「割合」(当前、当り前、割当り前)と割り勘がほとんどである。

(25) 古賀謹一郎「西使日記」、『大日本古文書・幕末外国関係文書 附録之二』(東京帝国大学、一九一三)、所収、一九九頁。

(附記)

本稿は、二〇一六年七月一〇日、台東区立中央図書館主催のトーク・イベント『柴田収蔵日記』の世界』における講演「柴田収蔵と蘭学」の一部に加筆したものである。報告の機会を与えられた平野恵氏と台東区立中央図書館に感謝したい。

〔二〇一六年二月一〇日提出〕(東北大学名誉教授)